

大阪公立大学大学院 創薬科学研究科 創薬科学専攻

開設時期	2026年4月			
学位	修士(創薬科学)		博士(創薬科学)	
入学定員	博士前期課程	40名	博士後期課程	8名
修業年限		2年		3年
入試種別	一般選抜・外国人留学生特別選抜		一般選抜・社会人特別選抜・外国人留学生特別選抜	
学生納付金	[入学科] 282,000円(大阪府民及びその子)、382,000円(その他の者) [授業料] 535,800円(年額) [初年度納付金合計] 817,800円(大阪府民及びその子)、917,800円(その他の者)			
主な学びのキャンパス	〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1番1号(大阪公立大学 中百舌鳥キャンパス) ※細菌学研究室の研究指導等は阿倍野キャンパスで実施			

経済支援制度について

本学では、授業料減免や奨学金など、学生向けの経済支援制度を設けています。大阪府の支援制度「大阪公立大学等授業料等支援制度」や本学独自の支援制度等があります。

 詳細や申請方法はこちら

大阪公立大学
経済支援制度


ACCESS

【電車をご利用の方】

- 南海高野線「白鷺駅」下車、南西へ約500m、徒歩約7分。
- 南海高野線「中百舌鳥駅」下車、南東へ約1,000m、徒歩約13分。
- Osaka Metro御堂筋線「なかもず駅(5号出口)」から南東へ約1,000m、徒歩約13分。

【バスをご利用の方】

- 南海高野線「中百舌鳥駅」・Osaka Metro御堂筋線「なかもず駅」から南海バス(北野田駅前行131、131-C、132系統)で約5分、「府立大学前」下車。
- 南海本線「堺駅」から南海バス(北野田駅前行131、132、132-C系統)で約24分、JR阪和線・南海高野線「三国ヶ丘駅」から南海バス(北野田駅前行131、132、132-C系統)で約14分、「府立大学前」下車。


創薬科学研究科特設サイト
<https://www.omu.ac.jp/dds-special/>

大阪公立大学Webサイト
<https://www.omu.ac.jp/>


[お問い合わせ先]

大阪公立大学大学院 創薬科学研究科担当 Mail : gr-kyik-dds@omu.ac.jp

入試情報に関する
情報はこちら

大阪公立大学
入試情報サイト

大阪公立大学大学院

創薬科学
研究科

2026年4月開設

大阪から世界へ—— 創薬の未来を切り拓く 学びの拠点

大阪公立大学に新たに設立される「創薬科学研究科」は、理学、工学、農学、情報学、獣医学、医学といった多様な学問領域を横断的に結集し、革新的な医薬品創出を担う人材の育成を目指しています。

医薬品開発は、病気に苦しむ人々に新たな治療の選択肢と希望をもたらし、社会の持続的発展に貢献する極めて重要な営みです。近年のパンデミック、希少疾患の克服、高齢化に伴う慢性疾患への対応など、世界が直面する課題はますます複雑化しており、創薬科学の果たす役割は一層大きくなっています。

一方で、日本の創薬基盤や技術力の国際競争力は低下が懸念されています。基礎から応用までをシームレスに結び付け、産業界と学术界が一体となって創薬を推進すること、そしてその中核を担う人材の育成が今強く求められています。

本研究科では、博士前期課程において、創薬の全体像を体系的に学び、研究現場で即戦力として活躍できる力を養います。特徴的な科目として、配属先とは異なる分野に挑戦する「異分野創薬ラボ体験プログラム」や、英語での発信力を鍛える「創薬科学グローバルプレゼンテーション」などを用意しました。これにより、異分野の研究背景や世界的な研究動向に触れ、広い視野を持って創薬に取り組む力を培います。修了後は製薬企業や研究機関での即戦力としての活躍が期待されるだけでなく、博士後期課程に進学して、より高度で独創的な研究に挑戦する道も開かれています。

博士後期課程では、製薬企業との連携に基づく「創薬研究インターンシップ(ジョブ型を含む)」を導入し、企業現場で実践的な経験を積んでいただきます。さらに、海外の大学や製薬企業との交流を深める「グローバル合宿・在外研究体験」や、国際的な研究発信能力を強化するプログラムを通じて、国際社会で活躍できる創薬人材を育成します。医薬品開発はもはや一国だけで完結するものではありません。世界とつながり、世界に貢献する人材がこの研究科から羽ばたいていくことを期待しています。

「薬を創り、人を救う」という使命感と探究心を持ち、自ら考え行動できる研究者を私たちは全力で支援します。博士前期課程・博士後期課程の双方で培う専門性と実践力を武器に、創薬科学研究科は皆さんの情熱を未来へとつなぐ舞台です。共に創薬の新しい時代を切り拓き、大阪から世界へ新しい医薬品を届ける挑戦を始めましょう。

創薬科学研究科 研究科長

乾 隆

INUI, Takashi



養成する人材像

創薬科学研究科では、次に掲げる人材を養成し、創薬科学分野、及びヘルスケアサイエンスを含めた関連分野の発展に寄与することを目指す。

【博士前期課程】

異分野融合型創薬科学研究の土台となる基礎科学の思考力、知識や技術を築くことができ、科学的な問題解決能力を有し、グローバルな視点で創薬科学研究を進め、自らの研究成果を適切に社会に伝えることのできる人材を養成する。

【博士後期課程】

優れたリーダーシップを有し、異分野融合型創薬科学のフロンティアに挑戦し画期的な新知見を生み出すことができ、創薬科学研究で得られた成果を国内外で社会に還元し、製薬企業や医療、健康分野でグローバルに貢献できる人材を養成する。

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

【博士前期課程】

博士前期課程では、本研究科の養成する人材像に基づき、以下の能力を身に付けたものに修士(創薬科学)の学位を授与する。

- 1 本研究科の各研究領域に関する修士論文の作成・発表を通して、学術論文を調査・解析し、研究成果を論理的に記述する能力及び発表する能力を身に付けている。
- 2 創薬科学研究に関する多様な専門知識・技術を有し、異分野融合の重要性を認識したうえで、創薬プロセスを理解し、研究遂行する能力を身に付けている。
- 3 グローバルな視点から、研究遂行、判断、論理的思考、問題解決、プレゼンテーション、ディスカッションができる能力を身に付けている。
- 4 高い倫理観を持ち、社会的責任を果たすことの重要性を理解し実践する能力を身に付けている。

【博士後期課程】

博士後期課程では、本研究科の養成する人材像に基づき、以下の能力を身に付けたものに博士(創薬科学)の学位を授与する。

- 1 本研究科の各研究領域に関する博士論文の作成・発表を通して、高い研究能力や問題解決能力、主体的に研究課題から問題を抽出し、論理的に解決へと導く能力を身に付けている。また、研究成果を国際的に発信できるよう英語論文にまとめる能力を身に付けている。
- 2 創薬科学における多様な専門知の融合により、複雑な課題に対して実践的に解決できる能力を身に付けている。
- 3 創薬科学における世界的な動向や課題を理解し、国内外の研究者と協働するために必要な研究遂行能力とコミュニケーション能力を身に付けている。
- 4 創薬科学のフロンティアを切り拓くリーダーとして、起業家精神、新しいアイデアを実現するためのイノベーション能力や創造性、社会貢献への強い使命感と責任感、高い倫理性を身に付けている。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

【博士前期課程】

博士前期課程では、以下の方針に基づき教育課程を編成・実施する。

- 1 創薬科学や関連分野に関する特定の研究課題に取り組み、主体的に研究を計画・遂行し、得られた結果を適切に解析・分析して独創的で新規性のある結論に導く能力を養成するための科目(演習、実験・実習)を置くとともに、必要な研究指導を実施する。
- 2 創薬科学の基盤となる薬学の基礎的知識を含め、創薬プロセスの全体像を理解するための科目(講義)を置く。
- 3 異なる専門分野における最先端の実験技術やそれぞれに特有の研究手法を修得するとともに他分野の視点を学び、創薬科学に関する多様な知識や技術を養成するための科目(講義、実験・実習)を置く。
- 4 最先端の研究を行う学外講師により、創薬科学分野のより広範な専門知識と調査・研究方法を養成するための科目(講義)を置く。
- 5 世界で活躍する研究者に必要となる英語による創薬科学に関するコミュニケーション及びプレゼンテーション能力を養成するための科目(演習)を置く。
- 6 学術交流協定締結校や国際共同研究機関に所属する研究者により、国際的で幅広い視点からの知識や研究技術を養成するための科目(講義)を置く。
- 7 公正性の高い研究を実施するための基本的ルールや倫理観、先取権や知的財産の理解など現代社会が研究者や技術者に求める多様な知識や能力を養成するための科目(講義)を置く。

【博士後期課程】

博士後期課程では、以下の方針に基づき教育課程を編成・実施する。

- 1 創薬科学に関する研究を自ら立案して実行するための多様な専門知識と技術を修得し、独創的かつ柔軟性に優れた自立的な研究能力、総合的な視野で研究成果を発信する能力、また、研究者として必要な創造性、論理的思考力、問題解決能力、倫理観と責任感を養成するための科目(演習、実験・実習)を置くとともに、必要な研究指導を実施する。
- 2 製薬企業などの研究現場で創薬プロジェクトに参画し、様々な実験技術やデータ解析手法を修得するとともに、プロジェクト管理やチームワーク育成等の能力を身に付けるための科目(実験・実習)を置く。
- 3 創薬科学における国際的視野に立ち、学術交流、研究活動に貢献し、研究成果を世界に発信する能力、リーダーシップを養成するとともに、英語でのプレゼンテーション能力やディスカッション能力を養成するための科目(実験・実習)を置く。
- 4 起業家精神を育むために必要な基礎的知識、問題解決能力、リーダーシップ、イノベーション能力、高い倫理観と社会的責任感を養成するための科目(講義、演習)を置く。
- 5 最先端の研究を行う学外講師により、創薬科学分野のより広範な専門知識と調査・研究方法を養成するための科目(講義)を置く。

本研究科の各科目の学修成果は、定期試験、授業中の小テストや発表などの平常点、レポートなどで評価することとし、その評価方法や基準については、科目毎に授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて明示する。また、特別演習科目及び特別研究科目の学修成果は、研究課題への取り組み状況、研究結果に関するプレゼンテーション内容、教員や他の大学院生とのディスカッション能力などについて、総合的に評価することとし、その評価方法や基準については、科目毎に授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて明示する。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

【博士前期課程】

博士前期課程では、次に掲げる人物を求める。

- 1 異分野融合型創薬科学研究に関連する専門分野(薬学、理学、工学、農学、医学、獣医学等)において、少なくとも1つの分野で優れた学業成績を持ち、異分野融合研究に関心と意欲のある人物。
- 2 本研究科での学修・研究に必要な基礎学力を備え、グローバルな視点で創薬科学研究を進める意欲のある人物。
- 3 異なるバックグラウンドを持つ研究者同士が協力するために必要な、高いコミュニケーション能力や協調性を有する人物。

【博士後期課程】

博士後期課程では、次に掲げる人物を求める。

- 1 優れた学業成績を持ち、特に異分野間での知識融合やアイデア発展能力、論理的思考力、及びインターディシプリナリーなアプローチができる高いポテンシャルを有する人物。
- 2 大学院博士前期課程修了程度以上の基礎学力を有し、グローバルな環境下で学際研究に積極的に取り組む意欲があり、高度な英文読解力と英語表現力を有する人物。
- 3 異なるバックグラウンドを持つ研究者を牽引するリーダーシップを発揮しながら研究を進め、その成果を適切に伝える高いコミュニケーション能力を有する人物。
- 4 創薬科学分野あるいは関連する分野で大学院博士前期課程修了以上の研究能力を持ち、自ら研究を立案・計画・遂行できる優れた能力と知的な好奇心を備えた人物。

これらの基準に基づき、以下の能力や適性を身に付けた人物を選抜する。

- 1 広範な基礎知識：創薬科学研究の基礎となる専門分野を含む大学における自然科学系の基礎的な科目を幅広く学び、基礎学力及び各専門分野に関する基本的な知識を身に付けた人物。
- 2 英語能力：創薬科学分野や関連する分野における英文を読解し、英語で表現するための基本的な能力を身に付けた人物。
- 3 課題解決能力：創薬科学分野や関連する分野に関する課題を見つけ、解決を目指すための基本的な能力を身に付けた人物。
- 4 コミュニケーション能力：教員や学生との議論に必要なコミュニケーション能力を身に付けた人物。

これらの基準に基づき、以下の能力や適性を身に付けた人物を選抜する。

- 1 広範で深い基礎知識：創薬科学研究の基礎となる専門分野や関連する分野を含む大学及び大学院博士前期課程における自然科学系の基礎的な科目を幅広くかつ深く学び、高い基礎学力及び各専門分野の豊かな知識を身に付けた人物。
- 2 英語能力：創薬科学分野や関連する分野における英文を読解し、自らの研究成果を英語で論理的に表現し発表するために必要な能力を身に付けた人物。
- 3 課題発見と解決能力：創薬科学分野や関連する分野における諸課題を見つけ、それらを体系的に整理し、合理的に解決しようとする高度な能力を身に付けた人物。
- 4 論理的思考力とコミュニケーション能力：研究者間の議論を通じて深く考察できる論理的思考力とコミュニケーション能力を身に付けた人物。

研究科の特徴

1 異分野融合に基づく教育・研究

異なる専門分野の教員で構成される研究科の特徴を生かした「異分野創薬ラボ体験プログラム」や多様な特論講義等を通して、多様な専門領域を有機的に連携させた“総合知による創薬”を実践する。

2 産学共創教育

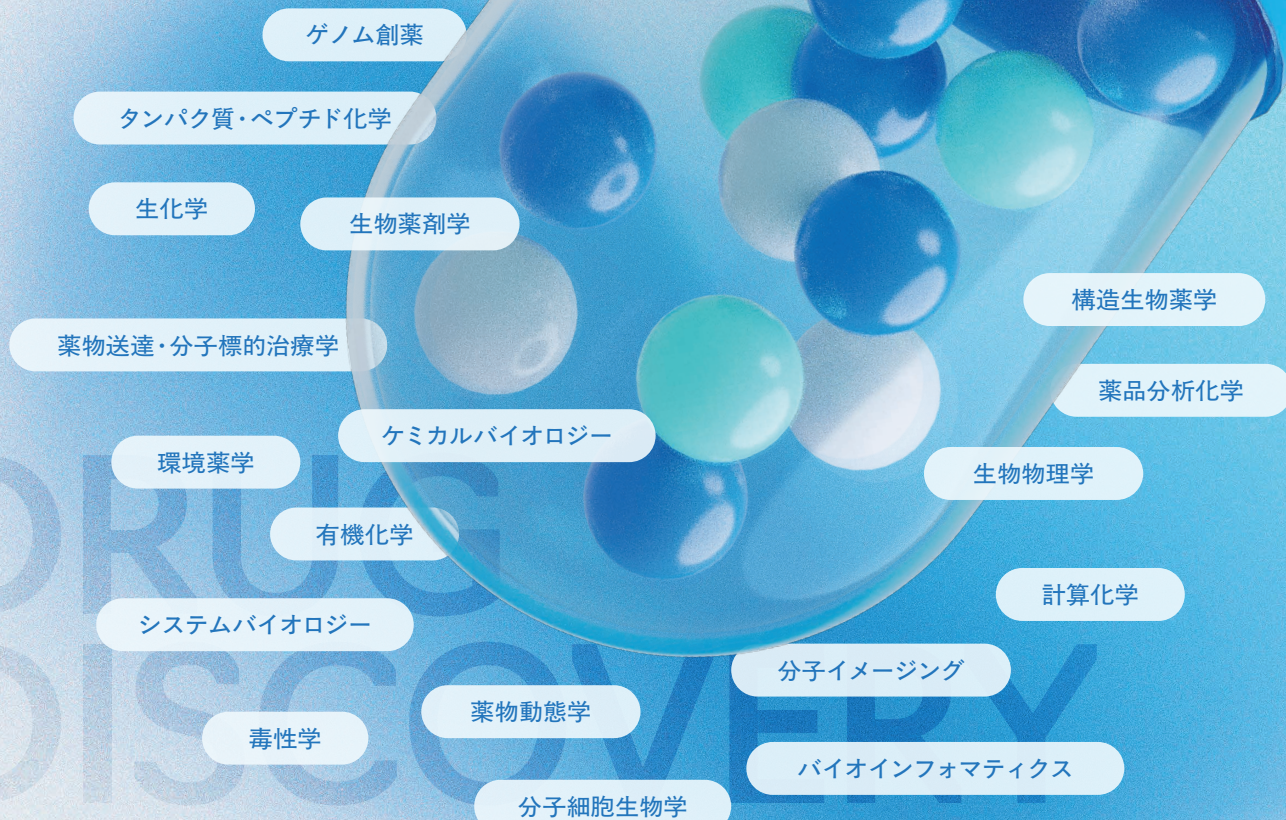
製薬企業と連携して開講される「創薬科学研究者養成講義」や「創薬研究インターンシップ」の履修を通して、製薬企業や関連業界において即戦力となる人材を育成する。

3 グローバル人材育成教育

「創薬科学グローバルプレゼンテーション」、「国際性涵養プログラム」、及び「グローバル合宿・在外研究体験」の履修を通して、国内外の研究者と協働するために必要な能力を身に付け、グローバルに活躍できる人材を育成する。

学問分野

以下の分野及びそれらの融合研究領域



カリキュラム概要

	大学院共通教育科目	専門科目
博士前期課程	研究公正など	- 創薬科学特別演習 - 創薬科学特別研究 - 研究企画ゼミナール - 創薬科学基礎講義 - 創薬科学グローバルプレゼンテーション - 異分野創薬ラボ体験プログラム PICKUP - 国際性涵養プログラム - 機能生化学特論 - ゲノム安全科学特論 - 生体高分子化学特論 - 医科学特論 - 生体高分子創薬科学特論 - 創薬抗体工学特論 - 創薬生命化学特論 - 標識創薬化学特論 - 創薬科学特別講義 - 計算分子生物学特論 - 細胞生物学特論 - 分子生物学特論 - 核酸創薬科学特論 - 創薬構造生物学特論 - 創薬材料科学特論 - 創薬免疫工学特論 - 病態創薬科学特論 - 創薬科学研究者養成講義
博士後期課程	- 研究公正 - スタートアップ&ビジネス戦略事例研究 - 事業化コンサルティング演習 - 知的財産戦略演習など	- 創薬科学特別演習 - 創薬科学特別研究 - 研究企画ゼミナール - 創薬研究インターンシップ PICKUP - グローバル合宿・在外研究体験 - 創薬科学研究者養成講義

PICKUP 異分野創薬ラボ体験プログラム

異なる専門分野において優れた研究実績を有する教員が行う最先端の創薬研究を体験する。本科目を通じて各分野における最先端の実験技術や、それぞれに特有の研究手法を修得するとともに他分野の視点を学び、異分野融合型の創薬科学教育・研究を実現する。

PICKUP 創薬研究インターンシップ

製薬企業等において、企業インターンシップを行う。製薬企業等と大学が連携して大学院教育を行い、国際競争に耐え得る研究力に裏打ちされた実践力を養成する。

想定される進路

【博士前期課程】

- 博士後期課程への進学
- 製薬企業、バイオテクノロジー企業等の研究職
- 保健行政や関連する基礎科学を所管する中央省庁・自治体や外郭団体 国立研究開発法人等の公的研究機関の職員

【博士後期課程】

- 国内外の大学や研究機関の教員・研究者
- 国内外の製薬企業、バイオテクノロジー企業等の研究開発職
- 保健行政や関連する基礎科学を所管する中央省庁・自治体や外郭団体 国立研究開発法人等の公的研究機関の職員
- 創薬ベンチャー企業の研究職・起業家



RESEARCH SCHEDULE

[研究スケジュール]

博士前期課程

- 【1年次前期】
研究計画立案
- 【1年次～2年次】
研究遂行
- 【2年次】
中間報告・修士論文作成
- 【2年次後期】
修士論文提出・発表

博士後期課程

- 【1年次前期】
研究計画立案
- 【1年次～3年次】
研究遂行・
英文学術雑誌投稿論文作成
- 【2年次】
中間報告
- 【3年次】
博士論文作成
- 【3年次後期】
博士論文提出・発表



研究紹介

機能生化学研究室

がん細胞の特性を
分子のレベルで解明する



加藤 裕教 教授

がんの悪性化は、非常に複雑で多くの過程を介して進行することが知られています。また、がん細胞が自ら増殖、浸潤していく際には、栄養飢餓など様々なストレスにさらされますが、がん細胞は新たな特性を獲得し様々なストレス環境下においても生存し続けることができます。当研究室では、神経膠芽腫などの悪性度の高いがん細胞において、活性化されている細胞内の代謝経路や細胞の運動性を担うシグナル伝達経路に着目し、研究を進めています。ゲノム編集技術を用いて特定の遺伝子を欠損させた数多くのがん細胞を独自に樹立し、生化学的解析、分子生物学的解析、イメージング解析技術を駆使することで、がん悪性化を進行させる代謝経路やシグナル伝達経路を、分子のレベルで新たに解明することを目指しています。さらには、新たに解明した分子メカニズムを基盤としたがんの発症や進行に対する創薬への可能性を探っていきたいと考えています。



創薬生命化学研究室

ペプチド化学を基盤とした
細胞内薬物導入法と
疾患関連分子の認識技術



中瀬 生彦 教授

がんを含む疾患にアプローチするタンパク質や核酸等の機能性分子は日々開発されています。しかし、それらの機能性分子は細胞内移行性が乏しい場合が多く、またエンドサイトーシスで取り込まれても細胞膜透過性が低いためにサイトゾルへ届かず、目的の活性が出ないことから薬にならないという問題が世界中に山積しています。私たちは、細胞内移行性の乏しい分子を高効率で細胞膜を通過させ、サイトゾルに確実に送り込むための膜透過性ペプチド (cell-penetrating peptides) の開発研究を行なっています。さらに、疾患関連分子に選択的に結合できる機能性ペプチドの研究も展開しており、独自性の高いスクリーニング技術で、目的分子に高効率で認識・制御可能なペプチド開発を進めています。従来法では困難な細胞内の疾患関連分子にアプローチできるペプチド技術を構築し、将来のバイオ医薬品候補となる創薬基盤研究を行なっています。



計算分子生物学研究室

計算科学で
生体分子の機能を理解し
創薬に活かす



森次 圭 教授

当研究室では、分子シミュレーションや情報科学、AI・機械学習といった計算技術を活用し、タンパク質などの生体分子が細胞内でどのように構造を変化させながら働いているのかを原子レベルで解析しています。構造データベースやAIを用いて分子の立体構造を再現し、分子動力学シミュレーションによってその動的なふるまいを予測することで、実験データと照らし合わせながら分子の働きや薬との結びつきを明らかにします。さらに、構造のゆらぎや変化を効率よく捉えるための新しいシミュレーション手法や、柔軟性を考慮したインシリコスクリーニング法の開発などにも取り組んでおり、これらの技術を通じて、生体分子の機能をよりの確に制御できる薬の設計を目指しています。



標識創薬化学研究室

化学標識法と
拡張型リガンド結合法を
機軸とした創薬化学



土居 久志 特任教授

当研究室では、創薬に資する化学反応の開発と化学者の経験知に計算科学を融合した低分子創薬に挑みます。具体的には、創薬の概念実証に有効な生体イメージング法として、放射性PETイメージング、超偏極MRIイメージング、および、近赤外光イメージングの化学標識法を創出します。PET研究においては、これまでに炭素-炭素結合による実用的¹³C-メチル標識法を開発してきました。低分子リガンドに関しては、標的タンパク質の辺縁外部から結合親和性を補完する独自の拡張型リガンド結合法を推進します。本件に基づいた分子設計は薬剤の活性増強に有効であり、これまでに、10-O-フルオロプロピル置換SN-38(抗がん剤)やN-メチル-3-O-フルオロプロピル置換SB366791(TRPV1阻害剤)等の高活性リガンドの開発に成功しています。本研究の最終目標として、先進の薬物送達技術と連携してセラノスティクス(診断と治療)への展開を図ります。



研究室一覧

最新情報は
WEBへ



研究領域	研究室名称	研究テーマ	学部	学科
基礎 創薬	機能生化学	がん細胞のシグナル伝達と代謝経路に関する研究	理学部	生物化学科
	計算分子生物学	生体分子の構造モデリングや分子動力学シミュレーションに関する研究		
	ゲノム安全科学	ゲノム安全科学とりわけ分子毒性学に関する研究		
		マウス個体あるいは培養細胞を対象として、放射線の生体影響に関する研究		
	細胞生物学	動物細胞のシグナル伝達とその異常による疾病のメカニズムに関する研究		
		マウス個体を用いて、骨格筋、脂肪細胞、肝細胞での低分子量GTP結合型タンパク質によって制御されるシグナル伝達系の異常と肥満、糖尿病、肝炎発症に関する研究		
応用 創薬	生体高分子化学	タンパク質機能の分子設計に関する研究	理学部	生物化学科
		生体材料に対する幹細胞の応答と分化・増殖制御に関する研究		
	分子生物学	レドックスバイオロジーに関する研究		
		レドックスバイオロジーを基盤とした冬眠や細胞運命決定に関する研究		
	核酸創薬科学	核酸医薬をより効果的に使う剤型や核酸を細胞内で制御する新手法の開発など核酸を中心に据えた新たなバイオマテリアルの研究		
		植物の環境ストレス応答機構や機能性成分の生合成に関する研究		
	細菌学 ^{※1}	感染症全般に加えて、薬剤耐性菌に関する研究		医学部 医学科
		深海・海洋性放線菌が生産する創薬シーズの探索および開発に関する研究		
	生体高分子創薬科学	生体内輸送蛋白質を用いた分子選択的認識機能を有するテラメード・マイクロキャリア蛋白質の設計、Trypanosoma brucei、及びTrypanosoma cruzi由来核酸合成系酵素の構造解析と阻害剤の開発、イヌ・ネコアレルギーに対する低アレルゲン化ワクチンの開発に関する研究		農学部 生命機能化学科
		ゲノム創薬に基づく創薬標的の探索や評価に関する研究		
応用 創薬	創薬構造生物学	創薬構造生物学領域やキナーゼの活性制御分子メカニズムの解明及び創薬に関する研究	理学部	生物化学科
		蛋白質のフォールディング(立体構造形成過程)を解析することで、アルツハイマー病に代表される蛋白質の異常凝集が引き起こす疾患群(フォールディング病)の治療法開発を目指す。特に、フォールディング中間体を標的分子とする創薬に関する研究		
	創薬抗体工学 ^{※2}	創薬抗体工学に関する研究		工学部 化学バイオ工学科
		医用材料(DDS・ホウ素中性子捕捉療法用ホウ素薬剤・組織接着剤・癒着防止剤)の開発、がん治療増感を目的とするがん微小環境の制御法の開発に関する研究		
	創薬材料科学	ペプチドに関連したケミカルバイオロジー、進化分子工学に関する研究		理学部 生物化学科
		細胞ペプチド化学を基盤とした創薬医学に貢献する薬物送達・機能制御技術に関する研究		
応用 創薬	創薬生命化学	機能性ペプチドの設計とバイオ医薬品開発に関する研究	工学部	化学バイオ工学科
		薬物送達システム、バイオマテリアル、機能性高分子化学、リボソーム、がん免疫療法、自己免疫疾患、免疫工学に関する研究		
	標識創薬化学	化学標識法の創製と生体イメージングを活用した創薬化学に関する研究		理学部 生物化学科
		病態創薬科学		
応用 創薬	病態創薬科学	細胞内分子輸送機構とその異常に伴う疾病発症機構解明に関する研究	獣医学部	獣医学科

※1 所属教員は医学研究科専任の兼任教員。研究指導等は阿倍野キャンパスで実施。 ※2 所属教員は工学研究科専任の兼任教員。2028年3月まで、研究指導等は杉本キャンパスで実施。

(2026年4月開設時の予定)